

●台湾・朝鮮・満洲と膨張する帝国日本。その博覧会には国威発揚と統治の成果が謳い上げられた。図像を交え、近代日本の他者像Ⅱ異民族・異文化像を描き出す力作。

# 近代日本の植民地博覧会

関西学院大学 山路勝彦 著

本書は近代日本において行われた植民地博覧会を取り扱っている。植民地博覧会とは植民地で開催された博覧会、および植民地そのものを主題にした博覧会のことである。植民地で開催された博覧会であるゆえに、主催した植民地政府の意向が直接的に反映されていて、いわば植民地統治の一環として行われたという性格を持ち合わせている。このため、植民地権力がむき出しに露呈されて場面が数多く見られ、帝国主義の暗い部分を映し出していると言ふことは可能である。……

むろん、植民地での博覧会は日本本土で同時期に開かれた博覧会と無関係ではなかった。例えば、昭和一〇年代、日中戦争、さらに太平洋戦争が激しさを増していくと、時代の要請を受け、国家の繁栄を見せつける国威発揚の博覧会が日本各地で開催されるようになる。……同じ時期、日本の国威発揚を狙う博覧会が朝鮮でも行われ、会場には多くの朝鮮人の熱気が充満していた。宗主国と植民地との双方でまったく同じ現象が生まれていた。博覧会での熱狂振りを見る限り、皇民化時代の日本と朝鮮の人々は同時代性を体験していたのである。

植民地博覧会は時流を敏感に反映する催しであり、植民地の特殊性も映し出して、日本本土では見られない独自性を持つていた。……それともいえることは、植民地であった台湾、朝鮮と、植民地でありながら日中戦争の戦場と化していた満洲とはおのずから博覧会に対する地元民の態度は違っていた、ということである。あるいは、総督府の全面的な指導のもとで展開された朝鮮、台湾の博覧会と、大連市を主体にした博覧会とは比べてみることで自体が理に合わないことである。とはいえ、近代日本が関わった植民地博覧会を通観する著作が今までにない以上、東アジア全域を視野に置いた本書の試みは決して無駄ではないと考える。本書は、こうした側面に留意し、日本の植民地で行われた博覧会の状況をつぶさに記述する試みである。

はじめに

## ●第一部 近代日本の他者像

第一章 〈野蛮人〉の表象、あるいは植民地主義の起源  
「無主の野蛮人」という言説／牡丹社での戦闘／「野蛮人」の表象／もう一つの出会いと「野蛮人」像の再生産

第二章 拓殖博覧会と「帝国版図内の諸人種」

植民地を展示する博覧会／日本見学旅行と博覧会／明治記念拓殖博覧会／和期の博覧会と「原住民の演出」

## ●第二部 植民地の博覧会

第三章 朝鮮博覧会という幻想

博覧会の中かの朝鮮館／植民地・朝鮮での博覧会／朝鮮博覧会の挙行／国威発揚の博覧会

第四章 満洲を見せる博覧会

植民地からの博覧会参加／「進歩一世紀市俄古万国博覧会」における満洲／大連勸業博覧会／満洲代博覧会／大東亜建設博覧会、そして終焉

第五章 統治手段としての展覧会

台湾勸業共進会の意義／警察主催の展覧会

第六章 台湾博覧会・植民地は今花盛り

台湾博覧会の開催／博覧会での展示／博覧会での催し物／沸き立つ大稲埕の住民／踊る「原住民」／博覧会の宴は終えて

おわりに・索引

体裁

・四六判・上製・カバー  
・三六〇頁・図版一八〇

定価

・三一五〇円  
(本体三〇〇〇円)

発行所 風響社

114-0014 東京都北区田端四一―四一九  
電話〇三(三二八二八)九二四九  
http://www.fukyo.co.jp

|           |                       |
|-----------|-----------------------|
| 注 文 書     |                       |
| 流通センター取扱品 |                       |
| 発売        | 風響社 TEL: 03-3828-9249 |
| 税込み       | 三〇〇〇円                 |
| 部         |                       |

山路勝彦 著

近代日本の植民地博覧会

ISBN978-4-89489-125-8 C1039 ¥3000E

〔お客様控え〕

ご氏名  
ご住所

お電話

月 日